



指月

SHIGETSU

修禪寺・寺報
第 47 号発行所 (〒410-2416)
伊豆市 修善寺 964
福地山 修 禪 寺
電 話 (0558)72-0053
FAX (0558)72-9680

あけまして
おめでとうございます



師 喃

真常



故最川さんを想う

住職 吉野 真常

十月五日修禪寺檀家総代・護持会長・最川治郎様が九十一歳で亡くなりました。故最川さんは、伊東で幼少時代を過ごし、兵役そして復員後に修善寺の最川家へ婿入り、戦後復興盛んな昭和二十二年温泉街の一角に「グリーンニング洗張り最川屋」を開店。グリーンニング業を礎にリネンサプライ業を興し、創意前進をモットーに、近代化と販路の拡大に努められました。本当にすばらしい、一等の経営者でありました。また長男・治久様の御言葉に「苦しかった時も弱音を決して吐かず、場面場面で家族の為、社員の為、会社の為、地域の為、業界の為と、黙々と仕事に精を出す父の背中が思い出されます。」とあるように、『至誠』の人でもありました。

十数年前、檀家七軒の太平・龍泉寺の住職になった時から、故最川さんとの親しい御付き合ひ（大先輩の方に、大変失礼になるかもしれませんが）が始まりました。故最川さんは、龍泉寺の諸行事のおり、よく訪ねて下さり、また貧乏寺である事を心配してか、過分

成る御寄付を戴いた事もありました。そしてそれは、いつも目立たないように、さりげなく。

龍泉寺住職になって間もなく、故最川さんが主宰していた『雑学友の会』に講師としてよばれた事がありました。四十歳そこそこの人生経験も乏しい私が、故最川さん達・大丈夫を前にして何を話したらいいのか正直悩みました。

六年程前、縁有って後堂（禅道場に於て修行僧を指導する役）として袋井市・可睡斎専門僧堂へ安居いたしました。可睡斎で秋葉三尺坊様への毎朝の御祈禱のおり、故最川さんが年間祈禱を申し込まれている事を知りました。私が可睡斎に居た六年間。私は、毎朝導師をしながら、故最川さんの御祈禱をさせていただきました。感謝の心をこめて。

故最川さんの事を考える時、二つの事が思い出されます。

一、幕末から明治を生きた偉人・山岡鉄舟に悟りを開かせたと言う、大阪の大商人・平沼専威翁の言葉です。

「大商売をしようと思ったら、迷って勝負にビクついてはダメです。そのコツとしては、まず前後のことを考えて決断しておき、いったん仕事に手をつけた

ら結果に執着せず、ずんずんやることです。禅に通じる無の心で。私心なく公明正大に、やるべきことをやる。このやり方こそ、どの事業も成功する極みとなるでしょう。」

二、道元禅師様の著書『典座教訓(禅寺で修行僧の食事をつかさどる役職を典座と言いい、その心得等を書いたもの)』に示されている、喜心・老心・大心という御言葉です。

喜心―よろこびを以ってことを行う心。今・ココに生かされている・生きている事をよろこべる心。故最川さんは、死ぬる時まで、御先祖・家族・会社・社会等により生かされている事を知り、それから全てに感謝しておりました。

老心―老婆が他人のために徹底して尽くすような心。また父母が一子を念うような心。慈悲とも言えます。故最川さんのさりげない・目立たない御親切を受けた方々は少なくないと思います。葬儀には、千人以上の人が集まりました。

大心―大山のようなどっしりと、大海のような広々とした、一方に片寄ったり固執したりする事のない心。長い会社経営の中には、いろいろな問題もあったことでし

よう。通夜の席、故最川さんの遺影の前に立った時、遺影の中に『誠』という字が浮かんで見えました。禅に通じる無の心で、私心なく公明正大に生き抜かれたんですね。

故最川さんは、決してむずかしい禅語や仏法の話はしませんでした。が、やはり悟道の人ではなかったのかと思わずにはいられませんでした。道は、脚下にある事を悟っていたのです。

最川さん、長い間ありがとうございました。最川さんに御会いできて本当によかった。



朧座 両国公演

今申樂 朧座 東京公演

○平成十九年の開創千二百年祭で特別公演された今申樂 朧座(おぼろぎ)による劇作品『修禪寺』が九月二十五日～二十七日、東京両国にて上演されました。会場は連日満席で修禪寺からも住職はじめ関係者が観劇に上京しました。

私と仏道

田中裕太郎

(朧座主宰・朧太夫)

私の祖父は、もともと、お寺の出でした。彼岸の折など、親戚への挨拶のため庫裡に上がったりますものですが、なんとなくお寺というものは私にとって、身近な存在でした。また、学生時は史蹟めぐりのサークルに入っていて、その関係で寺社仏閣はだいぶまわりました。(その時、修禪寺にも一度来たことがあります)

しかし、特に仏道に関心があつたというわけではありません。また、昔から水木しげるさんの妖怪の絵など大好きでよく見ていました。あくまでも想像上のものとして楽しんでいました。水木さんはよくエッセイなどで「目に

見えないモノというのは、本当にいるんです」ということを書かれるのですが、それは水木さん一流の洒落のようなものだと思っていました。

どちらかといえば、私はやはり科学的なものの見方を信じていたのです。

さて、十二年前から演劇を始めましたが、今から思えば、自分たちが普段行っている「現代演劇」というものに、どこか物足りなさを感じていました。そんな折、たまたま、「能」というものを真面目に観る機会に恵まれたのですが、これが私には非常に衝撃的だった。何か、「現代演劇」とは根本的に違う、物凄い力をそこに感じてしまったのです。

以来、私の「能」研究が始まりました。その際、常に心がけたことは、「能」を演劇として捉えるということ。そうこうするうちに、とうとう自分で「能」の台本を書いてしまいました。平安時代のある女性が主人公なのですが、この台本に共鳴して下さる役者や能楽師などの味方がだんだん現れ始めたのですから、よし、ひとつこれを舞台にかけてみようと思心したのです。

「今申樂 朧座」の旗揚げでした。平成十六年のことです。

実は、この旗揚げ公演の本番中に、とても不思議な出来事がありまし

た。あれはいったい何だったのだろうかとか、私は今でも思っています。他の関係者も、おそらくそうでしょう。



御前様を迎えての上演アフタートーク

手短に書きますが、どうも、主人公の女性本人が、上演の最中、舞台の袖に控えていたあるスタッフに降りて来てしまったらしいのです。そして、彼女は、終演後もずっとそのスタッフにとりついたまま。私がある時、何よりも懸念したことは、そのスタッフの顔つきが全くの別人になってしまっていること以上に、肌がどんどん冷たくなってきていることでした。このままではまずい。病院とお寺、どちらに担ぎ込もうか悩んだあげく、私は後者を選びました。そして、なんとか事なきを得たのです。

この時、私の得た教訓、それは、「能」という芸能がやはり神事に

端を発しているらしいということ。そして、特に昔の人の残した言葉や作品に使う時は、歴史というものを冒瀆せぬよう、くれぐれも注意しなければならぬということでした。

この時の体験で、私の世界観も人生観も大きく変わりました。目に見えないモノは、確かに存在するのかもしれない。そして、そういう世界を描くこと、目に見えないモノをひと時なりとも目に見えるようにすることこそ、本当は私たちの仕事なのではないか。

臚座の二作目に北条政子と源頼家を取り上げようと思いついて以来、修禪寺には何度足も運んで拝観させて戴きました。御本尊をはじめ、ここには政子が寄進した数々の品が残されている。とりわけ、彼女が経典に自らしたためたという一文が、深く心に染みました。

「征夷大將軍左金吾督源頼家の菩提の為、尼、之を置く。」

結局、この一文が、私に『修禪寺』という台本を書かせてくれたのです。

この作品を、私たちはこれまでに三度上演してきました。三度目は、昨年の九月に東京両国の劇場で千秋楽を無事迎えたところです。この公演の稽古中、私たち一座は吉野御住職にお許しを戴き、修禪寺に一日入山（修行体験）を

させて戴きました。

なぜ、一日入山をお願いしたかというと、この『修禪寺』という作品が、実は仏道を主題とする劇であるということに、作者である私自身が、前二回の上演を経てようやく気が付いたからです。

一日入山を通じて、参加させて戴いた役者やスタッフが感じたことは、それぞれだったことでしょう。ここでは、私が一番強く感じたことを紹介させて戴きたいと思っています。

それは、食べ物の美味しさに難さというものを、つくづく知ることができたということです。私は、この時の思い出というと、読経より坐禅より、まず、この朝夕に戴いた食事のことを思い出してしまうのです。

そして、二年前、修禪寺開創千二百年祭にこの作品をお取り上げ戴いた折、地元の皆様が私たちのために美味しい握り飯を作って下さったのに、もったいないことに私たちは出演前の緊張のため食べることができず、だいぶ残してしまったことも、今、併せて思い出されるのです。

美味しゅうございました。

本当に有難うございました。

こうして振り返ると、私は、演劇を通じて仏道というものと出会って、少しずつ縁を深めさせて戴いているような気がします。



庭園特別公開

○当山境内裏手にある庭園が護持会主催で十一月二十一日から三十日まで試行的に公開されました。紅葉の観光シーズンと重なり、またテレビや新聞でも取り上げられ、期間中は大混雑でありました。訪れた多くの観光客が庭園を散策しながら深まる秋を楽しんでいました。



庭園公開

平成二十一年 来訪者

一月四日 伊豆市消防団様 出初式
 二月十二日 静岡県第三宗務所寺族会様 拝観
 二月二十六日 静岡市寺族会様 拝観
 三月十六日 熱海女性の会様 拝観
 三月二十八日 山梨県藤田寺参拝団様 拝観
 四月五日 三島市高嶋社中様 お抹茶接待
 四月八日 秋田県黄龍寺参拝団様 参拝
 四月二十一日 埼玉県光明寺参拝団様 拝観
 四月二十四日 SBS学苑様 拝観
 五月三〜四日 修善寺少年野球スピリッツ様合宿
 六月一日 愛知県順乗寺参拝団様 拝観
 六月十日 温泉場調理師組合様 魚鳥供養祭
 七月三・四日 修善寺小学校様 七夕まつり
 七月九日 修善寺南小学校様 総合学習
 七月十五日 丹那小学校様 総合学習
 七月二十八日 鎌倉女学院中等部様 拝観
 八月二十六日 東京都円成寺参拝団様 祈祷
 八月二十七・二十八日 東京都麗座様 参拝合宿

八月三十一日 真言宗寺院研修会様 拝観
 九月十七日 岐阜県長国寺参拝団様 拝観
 十月二日 静岡県第三宗務所護持会様 拝観
 十月六日 山梨県寺族会様 拝観
 十月二十六日 江戸消防記念会様 木遣奉納
 十月二十九日 神奈川県第一宗務所参拝団様拝観
 十月三十日 ㈱ニッビ様 新人研修
 十一月三日 国民文化祭北条早雲サロン開催
 十一月十日 修善寺南小学校様 総合学習
 十一月十二日 熊坂小学校様 総合学習 参拝
 十一月二十一日 修善寺小学校様もみじ祭り開催
 十一月二十一日 塩谷家・鈴木家 仏前結婚式
 十一月二十二日 三須家・山口家 仏前結婚式
 十一月二十三日 三島市高嶋社中様 お抹茶接待
 十一月二十六日 臨済宗妙香会様 拝観・奉詠
 十二月四日 千葉銀行様 拝観
 十二月七日 真宗の会様 拝観
 十二月二十日 日中文化交流会様 拝観
 九月〜一二月参加者数 延べ 二八二名

火曜坐禅会

御寄付

○旧典座寮換気扇一式
 修禅寺佛教婦人会様
 ○寺山墓地無縁塔
 御影石製華立 一对
 大仁 (有)山口石材様
 ○境内縁台 三台
 上神戸 松根正子様
 ○境内水屋用柄杓 四十本
 小坂 三須定雄様
 ○八十八箇所巡拝草鞋マスケット
 牧之郷 内田家様
 ○八十八箇所巡拝草鞋マスケット
 牧之郷 山口惣一郎様
 ○八十八箇所巡拝草鞋マスケット
 南町 鈴木容子様
 ○八十八箇所巡拝草鞋マスケット
 小坂 三須定雄様
 ○ぞうきん 三十枚
 小坂 鈴木登美男様
 ○竹ぼうき 十五本
 中里 三須章吾様
 ○竹ぼうき 二十本
 柏久保 杉村英明様
 ○竹ぼうき 六本
 小山 梅原 實様
 ○新米 三十キロ
 中里 唐澤之泰様
 ○蜜柑 一箱
 熊坂 渡邊里子様
 ○野菜 たくさん
 紙谷 三須まさ乃様
 ○野菜 たくさん
 北又 野村廣志様
 ○野菜 たくさん
 栃木県 藤江秀治様
 ○野菜 たくさん
 湯舟 波多野靖様

○野菜 たくさん
 小山 児島とし子様

歳末たすけあい托鉢御報告

●十二月十日・十一日に恒例の歳末たすけあい托鉢が行われ、多くの浄財が集まりました。

十日・温泉場

十一日・駅前 雨天中止
 合計 十万八五一五円

例年のごとく、全浄財は伊豆市社会福祉協議会に寄付させて頂き戴きました。あたたかいお志し誠にありがとうございます。

謹告

去る平成二十一年十二月十二日修禅寺四十一世住職丹羽圓宗師が遷化されました。

(世寿九十八年)

十二月十七日に本寺である牧之原市石雲院住職植村正道老師を拝請し、多くの関係寺院、檀信徒の皆様にご協力をいただき、当山本堂において本葬儀が厳修されました。

ご参列、ご協力くださいました方々には心より感謝いたしますとともに、謹んで誌面をもってご報告申し上げます。

修禅寺寺務所